
Princess Garden

黒崎杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r i n c e s s G a r d e n

【Nコード】

N 0 8 3 0 L

【作者名】

黒崎杏

【あらすじ】

連載が進み次第書きます。

姫の日常（前書き）

文がカオスWWおKな方のみGO！

姫の日常

（こんな空・・・私には似合わない・・・。）

黒のローブに身を包み、空を見上げるは銀髪の少女。

（今日はお祭りなのよ・・・！なのに・・・なのに・・・。）

「なんなのよ！！この空は！！！」

モーバレイン魔法国家。広大な領土を持ち、王都、フェルゼンには高位魔導師を志す者たちが国内外問わず集まってくる。現在王位についているのは、32歳の若き女王、レスカ・アーマイン・モーバレイン。美しく慈悲深いことで有名である。王都フェルゼンに巨大な城を構え、永遠に平和な国を目指し政治を行っている。

そんな王都、フェルゼンは今、祭で盛り上がっている。年に一度の魔法祭だ。誰もが楽しみにするこの祭を、この国の姫も楽しみにしていた。

モーバレイン魔法国家、第一王女、ミリアーナ・ルナシェフス・ト・モーバレイン。ミリアーナは長いので、普段は縮めてミリアと呼ばれている。14歳の若さで、高位魔導師の資格を持ち、王立魔法学校の最上級クラスに所属する。肩までの銀髪に紫の瞳をもった美しい姫である。

が、今は少し機嫌が悪いようである。理由は天気。祭まであと2時間を切ったのだが、空は相変わらず灰色のままなのである。雨であろうが、魔法使いであれば簡単な術で濡れないようにすることが可能なのだが・・・。

「こんな空じゃ気分が晴れないじゃない！！」

王城、フェルゼン城。王都を見渡すことができる広い部屋。窓の外空を見て、ミリアは言う。

「祭りは天気に関係なく開催されます。中止になることはございま

せんのでご安心を。」

その言葉に返事をするのは、ミリア直属の専属執事兼ボディーガード。アドリイ。それが本名なのかさえ、ミリアは知らない。生年月日（見た目は16〜17）も、出身地も知らない。誰に聞いてもまともな答えは返ってこないし、アドリイも教えてはくれない。ただ一つわかるのは、ミリアに絶対の忠誠を誓っているということ。茶髪に濃いブルーの瞳をもったこの従者は魔剣を自在に操り、時には魔術をも駆使してミリアの盾となるのだ。・・・世界一堅い盾に・・・気分の問題なのよ！気分！」

そんなアドリイを、ミリアはとことん困らせる。

「そうでございますか。では、気晴らしに紅茶などはいかがでしょう？」

が、アドリイは困った顔一つ見せずに言葉を返す。幼いころから次期女王のミリアに仕える為に教育されてきたのだ。ミリアに仕え続けて、もう9年になる。対応には慣れているのだ。

「・・・。」

ミリアは黙る。紅茶はミリアの好物の内の一つなのだ。

「今は3時。ティータイムにございます。祭は5時から。まだ時間がございます。」

「気晴らし・・・か・・・。そうね。それがいいわ。シュルエを呼んで。」

大好物につられる天才魔導師。

「畏まりました。」

そう言ってアドリイがパチンと指を鳴らす。

「失礼します。」

どこにいたのか、廊下から一人のメイドが入ってくる。ミリア専属メイド、シュルエ・マトリーヌ。黒髪縦巻きツインテールに赤のリボン。白く透き通った肌に大きな漆黒の瞳。可愛い顔だちにメイド服がよく似合う。黒髪黒目はこの国では珍しく、どこか地方の出身らしい。

「お呼びでしょうか。アドリイ様。」

（・・・様、ねえ・・・WW）

ミリアはクスリと笑う。シュルエはアドリイのことが好きなのである。・・・アドリイは恋などというものに興味などさらさらなかったのだが。

「・・・？呼んだのは私ですが、用があるのは姫様です。」

まだ新人のシュルエに容赦ない注意。

（メイド長はもつと怖いけどね。）

ミリアはアドリイが手加減していると思っているが実際はそうではない。彼女はミリア直属のメイドではない。ミリア直属の執事であるアドリイは彼女より身分は高いが、上司ではないのだ。したがって、アドリイにシュルエを教育する義務はなく、ミリアに無礼をはたらいたときのみ注意するのである。

「し・・・失礼しました。ご用でしょうか、姫様。」

アドリイいわく「仕事のできないメイド」が言う。

「紅茶の用意をお願い。いつもどおりでいいわ。」

「畏まりました。」

「あつ・・・そうそう、2人分の用意をお願い。マリナも呼ぶわどーせ祭にも来ないつもりで本にまみれてるんだろっから。」

「はい。少々お待ちください。」

シュルエが去った後、ミリアはつぶやく。

「シュルエは料理は上手いのよね・・・。」

「掃除はできませんが。」

ミリアは笑った。

姫の日常（後書き）

いやぁ・・・カスイ・・・。まあ、なにはともあれ、読んでくださってありがとうございます。ぼちぼち投稿していきますんで、またよろしくです。

リア友・・・蘭

見たかな？？後で感想聞かせてね！

魔女召喚！？（前書き）

続きます。

魔女召喚！？

「はぁ・・・。」

一向に晴れる気配のない空を見て、溜息をつく。そんなことしたって、晴れるわけないことくらい、ミリアだってわかっている。

「今にも降り出しそうですね。」

アドリイは顔色ひとつ変えずに言う。

「そうね・・・「キャアアアアアア！！！！！！！！」」

シュルエの声だ。

「・・・。。。。仕事、できないでしょう？・・・行ってまいります。」

「え・・・ええ。いつてらっしゃい・・・。」

ミリアは大きなソファアからゆっくりと身を起こす。マリナを呼び出すために。

魔力を開放すると共に、床に巨大な魔法陣が浮かび上がる。それを見、満足したかのようにミリアは言った。

「マリナ・スウェイリオンをここへ！！」

王都の外れにある、深い森。そこに、屋敷はあった。外観にこれといった特徴のないこの屋敷の主こそ、魔女、マリナ・スウェイリオンである。

主、といっても、この屋敷にはマリナと召使のエルしか住んでいないのだが。外見は17〜18位。紫の長い髪をポニーテールにし、同じく紫の瞳は、いつも、どこか遠くを映しているように見える。

「マリナ様、紅茶をお持ちしました。」

「有難う、エル。」

エル、という名で呼ぶたび、彼女は嬉しそうに笑う。彼女はもと

もと、エルという名ではなかった。もともと力の弱い<小悪魔>だった彼女は、悪魔の棲む魔界から追放され、森を一人さまよっていたところ、マリナに偶然出会い、助けられたのだ。エルというのは、その時マリナがつけた名である。緋色のショートカットの髪から、ちよこんと生える小さな悪魔の翼。それこそが、<小悪魔の証>であつた。

「調べものですか？」

「ええ、ちよつとね・・・。」

マリナが調べているのは、エルをのく小悪魔の証を消して、悪魔として魔界に帰すための方法である。魔女であるマリナは、友人であるミリアや、その執事とはちがい、1000年の時を生きることが出来る。

ミリアは魔導師であり、魔女ではない。<人間>として生きている。魔女は、人間ではない。マリナは、遙か昔、禁忌と呼ばれた呪文の詠唱に成功し、魔女となった元人間である。魔女となったその日から、もう何百年という歳月が過ぎた。エルと、出会った。マリナにはもう、そんなに時間は残されていない。外見は、アドリイと同じくらいに見えても、すでに900年以上は生きているのだ。

（私がいなくなったら、エルはどうするのだろう・・・。ミリアにでも頼もつか？あの子ならきっと・・・。）

・・・いや。

（私が、なんとかしてみせる。もう時間はないけれど・・・。）

エルの運んできた紅茶に手を伸ばしたその時――。

！？

ちょうど、ミリアの魔法が発動したのだった。

「こんにちは、マリナ。元気だった？」

魔法陣の中心に現れたマリナと召使の小悪魔（確かエルとかいったか）に笑顔であいさつするミリア。

「・・・ええ、今ので体調を崩したわ。」

「こ・・・こんにちは。ミリア様・・・。」

うん、なかなか優秀な召使じゃあないか。

「体調が悪いなら、お茶でもしていきなさいよ。」

「はぁ・・・はじめからそれが目的だったんでしょっ?。」

呆れたようにマリナが言うつと、

「うん。」

ミリアはあっさりと認めた。

コンコン

「失礼します。紅茶をお持ちしました。」

アドリイがワゴンを押してやってきた。その後ろで――。

「申し訳ありませんっ!!ワゴンを横転させてしまいまして・・・。」

「

シュルエが深々と頭を下げる。ミスをした、というわけだ。

「ワゴンが横転って・・・。あなたとこの召使もなかなかやるわね。」

「マリナよりは優秀よお。」

「すみませんでした・・・。」

シュルエが下がった時、すでにテーブルの上には紅茶の用意ができていた。

「さすが、早いわね。」

「うらやましいかしら??。」

「私にはエルで十分だわ。」

その一言で、小悪魔の顔が輝いた。

「今日のおやつはブリオツシュです。」

ミリアは無邪気に笑った。

魔女召喚！？（後書き）

うーん、グダグダですね。最近月夜の姫書いて投稿遅くなりました。

最後のアドリイのセリフwwこれ入れたかったんですよえ。

「今日のおやつはブリオッシュだよ」。君は笑う。無邪気に笑う。

┐

・・・かなり無理やり入れちゃいました！！

えゝゝゝ、マリナとエルは、私の中ではまんまパチエ&こあです。

そーゆーことで 月夜の姫もよろしくです

作戦1（前書き）

。 。 。 。 。

作戦1

話があるといつて、人払いをしたため、今ここにいるのはミリアとマリナのみ。話とは…。

「祭りにいきたいって…。どうやって??あの頭の固い大臣はそんな事許可しないわよ?」

マリナの言うことはもつともだ。この国の実務を取り仕切る大臣はとても厳しい。実はミリアは、一度だってそとに出してもらえたことはなかった。

「……消すのよ。存在ごと。」

「!!それは…本気なの!?!」

存在を消す。それは、不可能ではない。記憶を操作出来さえすれば、簡単なことなのだ。

「捕まったら、私ひとりが処刑されるだけでは済まないわ。ミリア、あなたの自由は、未来永劫、なくなるのよ。」

捕まる?…それは…ない。

「本当に、そう思ってる?マリナ…?」

「!?!」

「あなたほどの魔力があれば、捕まることは、まず、ないわ。私は、そう思う。それにもし失敗するようなことがあれば私は、命がけであなたを守るわ。」

「…なぜ、そこまでして…?」

「確かに、失敗すれば、ただでは済まないかもしれない。あなたを逃がすことはできても、私は捕まるだろうし、場合によってはアドリイやシウルエなんかも捕らえられてしまうかもしれない。でもねマリナ。私は…すぐ勝手だけどね、もうここにいるのは嫌なの。どんなに頑張ったって、この魔法を使うことはきつとない。この城で生きて、テキトーな誰かと結婚させられて、何事もなかったかの

ように王位を継承して、この城で死んでいく…。私は、そんな生き方をしたくない！たとえ目の前にあるものが政略結婚への道だったとしても、せめてたどり着くまでは楽しく生きていたい！この手に自由をつかんでみたい！！」

「ミリア…。」

「ここでも何もせず、窮屈な城で一生を終えるくらいなら、私はどんなに困難でも自由を切り開く道を選ぶ！」

「……………わかった…。わかったわ。」

「本当！！？ありがとう、ありがとうマリナ！！」

ミリアはマリナに思いつきり抱きついた。…紅茶が派手にこぼれた。

「……………。」

使用人の心のため息が聞こえた…気がした。

「祭りの開始とともに作戦を開始するわ。祭りの間なら、人の心は隙だらけになる。記憶を改ざんしやすくなる。」

「さっすがマリナ！頼りになるわあ！」

「…で、私が大臣をおびき寄せてテキストに始末するから、あなたは記憶の改ざんをお願いね。」

「ええッ！！マリナ、それは危険だって！！」

「私がああの程度の強さの大臣に負けるとでも思うの？10秒で終わるわ！」

確かに、マリナの実力があればあんな奴敵ではないだろう。それに、ミリアが行ったところで部屋に戻れと言われて終わりだ。ここはやはりマリナに任せるのが得策なのだろう。

「マリナ…気をつけて。」

「ミリアも頑張んなさいよ。」

「もちろん！」

自由を、勝ち取れ。

「アドリイ、ごめんなさい。もしものために、先に言っておくわ。あと、シュルエにも言っというてね。」

「何に對してでありましょう。」

「いろいろ…よ。」

フフ…とミリアは笑う。

「畏まりました。」

この場合、記憶の改ざんも重要になってくる。この広い世界の空間を人の記憶、という形で少し歪めるのだ。細心の注意が必要になる。

「私は…完璧にこなしてみせる…!!」

その眼に宿りしは…決意。

作戦1（後書き）

かなり更新が遅くなってしまい申し訳ありません。

でも、月夜の姫の方はかなりすみましたよww

で、ブログ始めたので、そっちもよろしく願います！

<http://genhikou.exblog.jp/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0830/>

Princess Garden

2010年10月8日14時33分発行